

義人はいない、ひとりもない

「ローマの信徒への手紙」は新約聖書の中で最も重要な書簡である。使徒パウロはこの手紙で、人間の罪とは何か、罪の贖いとは何か、イエス・キリストの十字架の福音とは何か、福音を信じて生きるとはどういうことか、というキリスト教信仰の神髄を体系的に、筋道たてて、語っていく。

第1章で彼は異邦人の罪を語った。特に1：18以下で、当時のローマ帝国の宗教的、道徳的状況を例にとって、神から離れた人間の罪の姿を赤裸裸に描いた。そして第2章と第3章の前半で、神の選民を自認するユダヤ人の罪を語った。

そして今日の部分で（9～18節）彼は次のように問い掛けて、結論を述べる。「では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。すでに指摘したように、ユダヤ人もギリシャ人も皆、罪の下にあるのです」（9節）。人間はみな、ユダヤ人も異邦人も、神の前に罪を負った存在であって、その罪に関して、神の前に弁解のできる人はいない。

そして次の10～18節で、全ての人があるという現実を旧約聖書の言葉を引用して証明する。「義人はいない、ひとりもない」で始まるこの箇所は、旧約聖書の或る一つの書からのまとまった引用ではなく、詩編とイザヤ書から幾つかの言葉を引用してつなぎ合わせて、まるで一つの文書のようにまとめたものである。

或る学者によれば、これは当時の教会にあってよく知られていた、人間の罪の姿をうたった「嘆きの歌」ではなかったかという。また或る学者によれば（バークレー）、この箇所のように聖書の言葉を断片的に集めて、つなぎ合わせて用いるのは、当時のユダヤ教ラビたちの説教の一般的方法であって（カラズと呼ばれた）、パウロはその方法を用いているという。

パウロは「詩編」と「イザヤ書」のいろいろな箇所から、神に反逆し反抗する人間の不信仰と背信を描いた言葉（人間の醜さを描いている箇所）を引用して一つの文を構成する。そして、いかに人間が神から離れた存在であるか、神の前に罪を負った存在であるかを論証しようとするのである。

この箇所をまとめて言えばこうなる。罪は、人間と神との正しい関係を破壊し神の前に立ち得ないものにした。罪は、人間を霊的、道徳的に無力無益な存在にした。そこから人間の人格的破綻が起こり、人は互いに相戦い、争い、敵対し、欺き、血を流し合うものとなった。神を神として恐れないうところに罪の根源があり、人間の悲惨がある。これが罪の下にある人間の現実である、というのである。

ここに描かれている表現は極端のように見えるが、まさに、これが人間の罪の現実なのである。そして、この「罪の光の下で」人間を見るとき、ユダヤ人とギリシャ人の区別はまったくないのである。西洋人と東洋人の区別も全くないのである。白人と黒人の区別は全くないのである。学問があるかないか、教養があるかないか、身分が高いか低いか、そのような区別は全くないのである。神の前に義人はいない、ひとりもないのである。

こうして使徒パウロは、すべての人は罪を負った存在であること、イエス・キリストの福音、即ち、キリストの十字架による罪の贖いと赦しを必要としていることを力を尽くして語るのである。